

田
地
文
子

私
の
愛
情
論

△著者紹介▽

作家。明治38年東京浅草生れ。日本女子大付属高女中退。雑誌「女人芸術」に戯曲「晩春騒夜」を発表、女流劇作家として華々しくデビューしたが、のち小説に転じ、昭和28年「ひもじい月日」で日本女流文学者会賞受賞、32年に発表した「女坂」(野間文芸賞)で、作家的地位を不動のものとした。『朱を奪うもの』『傷ある翼』『虹と修羅』の自伝的三部作を経て、古典文学への深い造詣から、王朝ものに取材した典雅で妖しい「なまみこ物語」(昭40・女流文学賞)のような作品も発表、さらには『源氏物語』の現代語訳を完成させた。

著書には、他に『花散里』『妖』『女面』『信天翁』『小町変相』『砧』など多数ある。

芸術院会員、文芸家協会理事。

私の愛情論

九八〇円

昭和五十五年十二月二十一日 初版発行 検印廃止

著者	円地文子
発行者	村川修二郎
発行所	主婦と生活社
	振替東京〇一三六三六四
印刷所	松濤印刷株式会社
	太陽印刷工業株式会社
製本所	若林製本株式会社

東京都中央区京橋三丁目五番七号 〒一〇四
TEL 販売部(五六二)二六五一 編集部(二七一)一五三〇

私の愛情論

目次

I 父親の愛情

私の中にある男性

好きな男、嫌いな女

忘れ得ぬ男

男を対象に生きた女

父性という愛情

異性の友情

男の中の女、女の中の男

II 男の愛情の裏表

男のやさしさ

男の可愛らしさ

男の好色

男の浮気

二

一六

二五

三〇

三五

四〇

四五

五三

五九

六三

六八

男の嫉妬

六

男の己惚れ

八

男の容貌

八

男の色、匂い、響き

九

男の涙

九

男の饒舌

一〇

男の友情

一〇

男の宿命

一一

男の陰翳

一一

III 男の眼、女の眼

いやらしい男

一二

陰気な男、陽気な男

一三

キザな男

一四

IV

年下の男

一四二

憎めない男

一四六

女に好かれる男

一五二

女の溺れる男

一五七

傷のある男

一六三

見惚れ、気惚れ、底惚れ

一六八

腐れ縁

一七三

男の女を見る眼

一七八

男の悪、女の悪

一八三

夫婦の愛情

金銭と男の愛情

一九九

夫婦でない男と女の関係

二〇四

夫婦喧嘩

二〇八

退屈な夫と妻
母、妻、娘

二三
二九

V 本物のフェミニスト

鷗外の女と漱石の女

三九

光源氏の女性観

三四

女を書く男

三九

あとがき

四五

装幀 磯谷時子

私の愛情論

I
父親の愛情

私の中にある男性

私は若い時分、いま考えると奇体なことだと思うが、自分と同じくらいか、あるいはほんのすこし年上の男の人には、すこしも心を惹^ひかれなかった。

好きになる人といえば、ずっと年上の人、もちろん奥さんや子供のある人にきまっていた。これはおそらく、私が末っ子で、ことに父親にあまやかされて育ったためだろう。精神分析的にいうと、エレクトラ・コンプレックスとかいう部類に属するわけだ。

父は、顔こそ猛獣^{もうじゅう}みたいのに、荒れて怖ろしかったけれども、身体はきめが細かく、滑^すべ滑^すべ白くて、どこもこれも鷹揚^{おうよう}に肉づいていた。あぐらをかいた大きい膝の間に、ちょこんと私の身体をいれてくれたこともあるし、お風呂へもずいぶん大きくなるまでいっしょに入った。抱いて寝てもらったこともあった。

二人で旅行すると、私の髪の結^{むす}い方や、お化粧まで気をつけてくれた。日本の父親は娘を可愛がるような顔をしないものだが、その点私の父は底ぬけだった。私が結婚した時には余程気にな

ったと見えて、新婚旅行のあとからおっかけてきたし、結婚して間もなく鎌倉にいた時分、女中が男と駈落ちしていなくなった時にも、かわりの女中をつれて自分できてくれた。

こんなことを書くのは、親のことでもの、ろけのようなもので、読むほうは有難くないことと私は知っている。森茉莉さんの鷗外に可愛がられた幼時の追憶を読むと、素晴らしい御馳走を食べた他人の話を聞くようで、やきもち根性をおこした記憶が私にもある。父親のことを書くなら、よろしく幸田文さんの書く露伴のきびしいつけ方のようなのが、読者には納得がいくというものである。

私がしかし、こんなことを書くのは、その後の人生で、父親が私を愛してくれたように、私を愛してくれた男の人のなかった恨めしさの裏返しみたいなものである。それでも、私がいくつになっても、心の底のほうで、男の人を信じたり、尊敬したりしようという甘さ（私はその感情が結構気に入っている。）を持っているのは、やっぱり人生ではじめて知った男性としての父親が、氣にいったやり方で自分を愛してくれたためだと思っている。

それほど私を可愛がってくれた父でも、やっぱり男は女と違うと思って情なかった思い出が一つある。

それは女学校に入る年の春、私と父と二人きりで、鎌倉の知人の別荘へ行っていた時のことであるが、その家には留守番の中年婦人とその息子がいるだけであつた。つまり、ふだんはいっしょにいる母も姉も女中もないで、父と私と二人きりだったが、折悪く、その時に私に初潮がき

た。今の人にはおかしいだろうが、予備知識をまったくあたえられていないので、私はびっくりした。

もちろん、量は多くなかったけれども、そういう時の用意の仕方でもまるで知らないのです、やたらに紙をたくさん使って、始末したのだが、父はそのことにもすこしも気づかなかったらしく、うちへ帰ってから、母に「文子は便所にあまり紙を捨てすぎる。お前から注意しておけ」と言ったそうだ。

父は生きているあいだじゅう、いちばん私をよく理解してくれていたはずだが、やっぱり、性の面ではわからない壁があったのだ。

父親の影響は正統派的な男のイメージを私の中にのこしているが、もう一つの好きな男の型にもフロイド的のいうと、幼時に意識下に植えつけられた印象が根になっているような気がする。

林芙美子の『浮雲』という小説に富岡という男が出てくる。女主人公のゆき子が、スマトラで軍関係につとめている時に知りあった愛人で、そこでもゆき子との三角関係から刃傷沙汰にんじょうがおこったりするし、日本へ帰ってきてからも、妻もあり、ゆき子との腐れ縁もつづけながら、温泉場で別の人妻とふと関係して、その夫が彼と通じた妻を殺すような事件をひき起す。ゆき子は結局、富岡との愛欲を断ち切れないで、彼をおって屋久島まで行き、そこで病死するのである。

この小説を私は林さんの生涯の傑作だと思いが、いつか、河盛好藏氏と『浮雲』について話していた時、河盛さんが囁んではき出すように、「富岡って男はなんていやな奴でしょう。女はこ

んな男が好きですかね」

と言われて、作中の富岡に内心魅力を感じていた私はどぎまぎしたことがあった。この時にも男と女とは違うなあと思ったのである。

なるほど、富岡という男は一つの女にうちこむことが出来ないで、次々に関係する女を不幸にしてゆく、常識的には質たちのよくないドン・ファンである。

女の中にもこういう男を大嫌いだという人もあるだろう。私なども、すくなくも自分の父親を原型とする男を肯定すれば、富岡の男性は河盛さんといっしょに唾棄だきすべきである。

ところが私には、富岡の滑すべっこくつめたい感触、女の中にゆったりいこうていられないニヒリスチックな放浪者の魂が、なんともあわれで捨てがたいものを感じる。

つまり、どの女にも、安心して腰をすえてしまえない、男の業ごうみtainなものが好きなのである。こんな好みも私の女らしいやきもち本能の変形かもしれないが、そのほかにもう一つ、こういう気持ちの根になっていることがあるような気がする。

私が生れたころ、私の家にKという書生がいた。(弁護士志願でうちにいて勉強していたのだそうだ。)Kはうちへくる前もさんさん道楽をした男だったそうだが、天成の二枚目なのだろう。そのころうちにいた女中たちなども全部といつていいほど、彼に好意を持ったという。彼は数年のあいだ私のうちで身を固くしていたが、おしまいに吉原の女郎にいれあげて、とうとう朝鮮へ行ってしまった。